年間選者賞（平成二十九年七月号～三十年六月号）　谷岡亜紀選

古川典子（平成三十年五月号）

わが庭に育つ菫は四種にて代はるがはるに摘みて見舞ひき

病室に菫を持てばその細き指にかざしてしばしを愛でき

幾度も忘れたと言ひわが病語らせホスピスのくだりでは泣く

目を閉ぢて君は摘むらん菫花われが行かざる病床にゐて

目蓋はそつと閉づべし不用意に力こもれば涙こぼるる

年賀状命令形に届きたり「まだまだしばらく元気でゐなさい」

●作者の言葉

この度は谷岡亜紀先生の年間選者賞をいただき、ありがとうございました。幸綱先生、谷岡先生から「登場人物を想像しながら読む」という評をいただいたが、この一連には三人の「君」が登場する。それぞれに素晴らしい歌人で、何より身近な方々だ。何を考えているのか掴みどころがないが豊かな詩情を湛えるK氏。何事にも一直線で努力を惜しまないB氏。生きることに対して決してむきにならない人生の達人のようなM氏。本当にお世話になりました。

●選者の言葉

五月号の選評にも書いたが、せつない歌である。その登場人物に私は、作者の周囲にいる小紋潤、馬場昭徳らを重ねて読むのだが、そうした「情報」を抜きにしても、心の深いところに響くものがある。特に菫の無垢な美しさは、何というか、微かに、敬虔な〈救い〉のようなものを感じさせる。唐突だが仏教の「他力」ということを私は思う。作者は六月号に〈卒園式滞りなく終りたりさあと出かくる午後の入院〉〈医療用麻薬の服用始まりて日がな一日目借り時なり〉と詠んでいる。いよいよホスピスでの日々が始まった。言葉を失うが、そして言葉の無力を思うが、短歌は確実に作者に力を与えている。一人の人間が生きる、その端正な姿勢が強く伝わる作品である。